～ みんなちがって みんないい　（その１）～

本年度、平戸市立田平北小学校から赴任してきました、指導教諭の木村 栄と申します。昨年まで勤務されていた米山先生のされていたお仕事を引き継がせていただきます。不十分なところが多いかと思いますが、頑張っていきますのでよろしくお願いいたします。

これから学校便りをお借りして、特別支援教育や子育てなどの話題を中心とした連載をさせていただきます。

第１回目の今回は、学校教育の基本的考えでもある「多様性を認め合う」ことの大切さについてお話させていただきます。

わたしが両手をひろげても
　　お空はちっとも飛べないが、
　飛べる小鳥はわたしのように
　　地面(じべた)をはやくは走れない
わたしがからだをゆすっても
　　きれいな音は出ないけど、
　あの鳴る鈴はわたしのように
　　たくさんなうたは知らないよ
　　鈴と　小鳥と　それからわたし
　　みんなちがって　みんないい

有名な金子みすゞさんの詩「私と小鳥とすずと」ですが、この詩は「多様な人々が互いを認め合い、協力して生きていくことの大切さ、その考えを実践する子どもを育てていく学校でありたいこと」を表現する一つの指針でもあります。

「多様性を認め合う」とは、「人種・性別・国籍・年齢・文化・宗教・思想・価値観・障害の有無など」の違いを認め、互いに尊重し合うことです。

今、世界は多様性を認め合う社会へと進んでいます。日本は２００７年に国連の「障害者権利条約」に署名し、そこから様々な法整備を急ピッチで行い２０１４年から順次施行しています。

日本は先進国の中でも「多様性を認め合う」考え方が遅れている国の一つです。多様性についての国別の意識調査を行った興味深いデータがあります。２０１９年に国際経済フォーラム(WEF)で発表された「世界男女格差報告書(ジェンダーギャップランキング)」で、日本は世界１５３ヵ国中、１２１位と史上最低指数でした。そして昨年６月の最新結果では１２５位と調査開始以来の過去最低を記録しました。この結果は先進国の中では最下位で、２０１５年に１０１位と１００位圏内を出てから毎年順位が下がり続けています。

政治や経済の停滞も原因の一つかも知れませんが、最大の要因は国民の中にある根本的な男女差別意識や、障害に対する意識改善が進んでいないことだと言えます。

「人と違うことは悪いこと・恥ずかしいこと」と捉える人が多いかも知れませんが、その意識が「差別や偏見」を生み、「排除する」動きへと向かっていきます。その最たるものが戦争です。我々は、ウクライナとロシア、イスラエルと周辺諸国との戦争において、科学や文化が発達した現代であっても、情報は統制され、正しいことを知ることができなくなり、人々の考え方は捻じ曲げられていく事実を目の当たりにしました。自分には「差別意識は無い」と思っていても、意外と価値観の中に刷り込まれてしまっていることが多いものです。

この価値観と多様性の関係を、児童の身近にある運動会を例に挙げて考えてみます。かけっこやリレーなどの競技であれば「足が速い、遅い」が価値観の中心になりますし、団体競技であれば「ルールや順番をすぐに覚えられるか、覚えられないか」「動作は機敏か、鈍いか」などが価値観の中心になるでしょう。「足の速さ」や「動作」などは普段の生活の中ではあまり意識することはありませんが、学級やチームの「勝ち、負け」が価値観の優先順位になってしまうと「差別」の対象になってしまいます。

これからこの連載で「特別支援教育」や「発達障がい」についてお話をさせていただく予定ですが、その根底にあるインクルーシブ教育の考え方は「多様性を認め合う」ことですし、そのために「個に応じた支援や対応」を大切にしなければいけません。

「多様性を認め、尊重する」ということは、価値観や時代など様々な条件に左右されることなく、守られ尊重されなければならないものですし、「人との違い」を「差別の対象」と捉えてしまう意識をみんなで「変える」ことから始まります。

これには何か特別なことや、取り組むための費用も必要ではありません。誰もが自分の意識を変えていくことから始めることができるのです。

「みんなちがって　みんないい」の意識をみんなで共有できると素敵ですね。